学校教育専修　佐々木　朗

平成 16 年 4 月 28 日
<4953　学校教育　佐々木朗>

教育社会学特論レジュメ

～「社会学」アンソニーギネンス　p45 ～p59　のまとめ～

１．前近代社会の諸類型

大発見時代、ヨーロッパから世界各地に向けて、旅立った人たちは、さまざまな人々に遭遇した。人類学者のマービン・ハリスは、それらの多様な社会を①狩猟民と採集民、②農耕社会ないし牧畜社会、③非工業的文明ない伝統的国家に分類した。

① 狩猟・採集社会

(1) 形成　３～４０人以下の小さな集団

(2) 生活　狩猟や漁撈、野生の食用植物の採集小集団（バンド）による移動を行なう。分業なく、協力関係が密。その日暮らしで十分やっていくことができ、貧富の差はない。差別はなく平等である。一定の縄張りの中を規則的に移住する。宗教的価値、儀式や儀礼活動を重んじる。

(3) 歴史　5 万年ぐらい前から。紀元前１万年前までは地球全体に広がっていたが、現在ではごく少数であり、今後の存在の可能性は、低い。

(4) 社会構造　戦争がない。富と権力に大きな不平等がない、戦争よりも協働が強調される

② 牧畜・農耕社会

(ア)牧畜社会

(1) 形成　狩猟・採集社会よりはるかに規模が大きく 25 万人以上の社会もある。

(2) 生活　牛や羊、山羊、らくだ、馬などの動物を飼育し、群れを管理している。季節の変化に伴い移動する。常時の食料供給が可能であるため、規模が大きい。

(3) 歴史　およそ１万 2 千年前から、現在まで。今ではほとんどが、より大きな社会の一部となっており、独自のアイデンティティを失いつつある。

(4) 社会構造　富と権力の面で大きな不平等が生まれる。首長や部族長、戦いの指導者は、個人的権力を持つ。

(イ)農耕社会

(1) 形成　牧畜社会とほぼ同様の時期

(2) 生活　自分たちで畑を耕し作物を育てる。移動することがないので物的財産を蓄積できる。

(3) 歴史　およそ 1 万２千年前から、現在まで。現在は、大きな国家の一部になっており、伝統的な生活様式が崩れつつある。

(4) 社会構造　戦闘行動はよくする。個々の村間で定期的な公益や政治的結びつきが生じてくる。

③ 非工業的文明ないし伝統的国家

(1) 形成　非常に大きな集団

(2) 生活　書き言葉を使用し、科学と芸術の交流を伴った。

(3) 歴史　紀元前 6 千年の頃以降。20 世紀初頭まで続いたが、現在は存在したい。

(4) 社会構造　他の国民を征服し、併合することで、規模を拡大していった。都市の発展を基盤に、富と権力の著しい不平等を示し、国王ないし皇帝による当地と結びついていた。職業的軍隊を発達させた。

２．産業化社会

(1) 形成　国民国家

(2) 生活　就業人口の大多数が農業ではなく工場や事務所で働いている。

(3) 歴史　18 世紀に始まった「産業革命」の結果、英国で最初に生じた。

(4) 社会構造　国と国に境界を持ち、内側にいる全ての人に適応する法体系のもと成立する国民国家である。工業技術は経済発展だけに終わらず、軍事目的にも利用された。

・第三世界の社会

〇第一世界～

(1)地域　ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、日本などの先進工業国。

(2)特徴　工業生産に基礎を置き、自由企業に相当の役割を任せている社会。農業に従事している人口はごくわずかであり、大多数は町部や年にすむ。伝統的国家におけるほど明白ではないが、階級間の大きな不平等は存在する。これらの社会は、複数政党制議会により統治されており、明確な政治的共同体ないし国民国家を形成する。

(3)歴史　18 世紀から現在まで

〇第二世界

(1)地域　ソ連、チェコスロバキア、ポーランド、ハンガリーなどの東ヨーロッパのかつての共産主義社会。

(2)特徴　工業を基盤においているが、経済システムが政府の統制によって運営される社会。かなり少数の人口が農業に従事し、ほとんどの人達は町や都市に住む。こうした社会のマルクス主義政府の目標は「階級のない」体制を生み出すことにあるが、階級間の大きな不平等は存在する。単一党社会で、資本主義と対立していた。

(3)歴史　20 世紀初頭からソビエト連邦が共産主義を放棄した 1991 年まで。それ以降

は、事実上消滅した。

〇第三世界

(1)地域　アジア、アフリカ、南アメリカのほとんどの国など、工業発達が遅れている社会。人々のほとんどが以前から住んでいた民族である。

(2)特徴　人口の大部分が農業に従事し、ほぼ昔ながらの生産方法を用いながら、農村地域に住む社会。しかしながら、農業生産物の一部は世界市場で売られている。18 世紀頃から西欧諸国に次々と植民地化されていた時は、中央計画経済で、私有財産企業間競争の役割を認めなかった。現在では、中央経済自由企業制度をとる国々もあれば、中央政府による計画化がなされる国もある。第三世界は、しばしば、「発展途上国」や「低開発国」と呼ばれる場合もある。また、大量の人口増加により、最低限の水準にも満たない生活を余儀なくされている国も多い。

(3)歴史　18 世紀(植民地として)から現在まで存在。

学校教育専修　佐々木　朗

アフリカの現状と歴史

今回の論文でいわゆる「第三世界」と言われたアフリカについて、その現状と歴史を調べた。

現在のアフリカ

アフリカには現在 53 カ国があり、独立している。日本より面積の小さい国が多く、人口も少ない。人口密度でみてみてもほとんどが日本より小さい。また、国民総所得を見ると、一番裕福な国であっても日本の１０００分の１程度であり、このデータからすると非常に貧しい現状があるということが読み取れる。

アフリカの歴史

アフリカ北部は、エジプト文明に見られるように早くから、人類の文明が開化していったが、それ以西、以南については、世界の国々からみると全くの未開であった時代が長く続いた。しかしながら、ヒトの祖先と思われる化石(ホモ・ハビリス)がアフリカ西部で発見されたことなどから、ヒトは古代からアフリカに住んでいたと考えられる。

紀元前５Ｃ頃、アラビア半島からエチオピアに侵入した民族（セム系集団）によって王国が建設された。４Ｃ頃にはキリスト教が取り入れられ、以後、植民地化されずに残った特殊と言える国である。

７Ｃ以降に、アラブ人が、アフリカ北部、アフリカ西部に侵入し、イスラム教を広めた。以降は、イスラムの厚い壁により、ヨーロッパ勢力は、アフリカへ進出することが難しかった。15Ｃになって、船により、ヨーロッパが次々とアフリカに進出するようになった。最初の頃の進出の大きな目的は豊富な金であった。しだいに、それが奴隷貿易となっていった。つまり、ヨーロッパ人の銃、ガラス玉、酒などと引き換えに、原住民の首長から奴隷としての交換が行われたのである。

その後 18 世紀までに、サハラ以南のいくつかの地域で、集権的な政治体制が形成され、王国ができていった。そこ頃(1807～1815) には奴隷貿易が廃止され、アフリカとの貿易はアブラヤシが中心となっていった。

１９世紀になるとヨーロッパ勢力は本格的にアフリカ全土に進出した。その大きな理由は産業革命が起こり、資本主義が発達し、機会制大規模工業の時代に入り、その工業を支える原材料の供給また、輸出市場として利用しようとしたことにある。

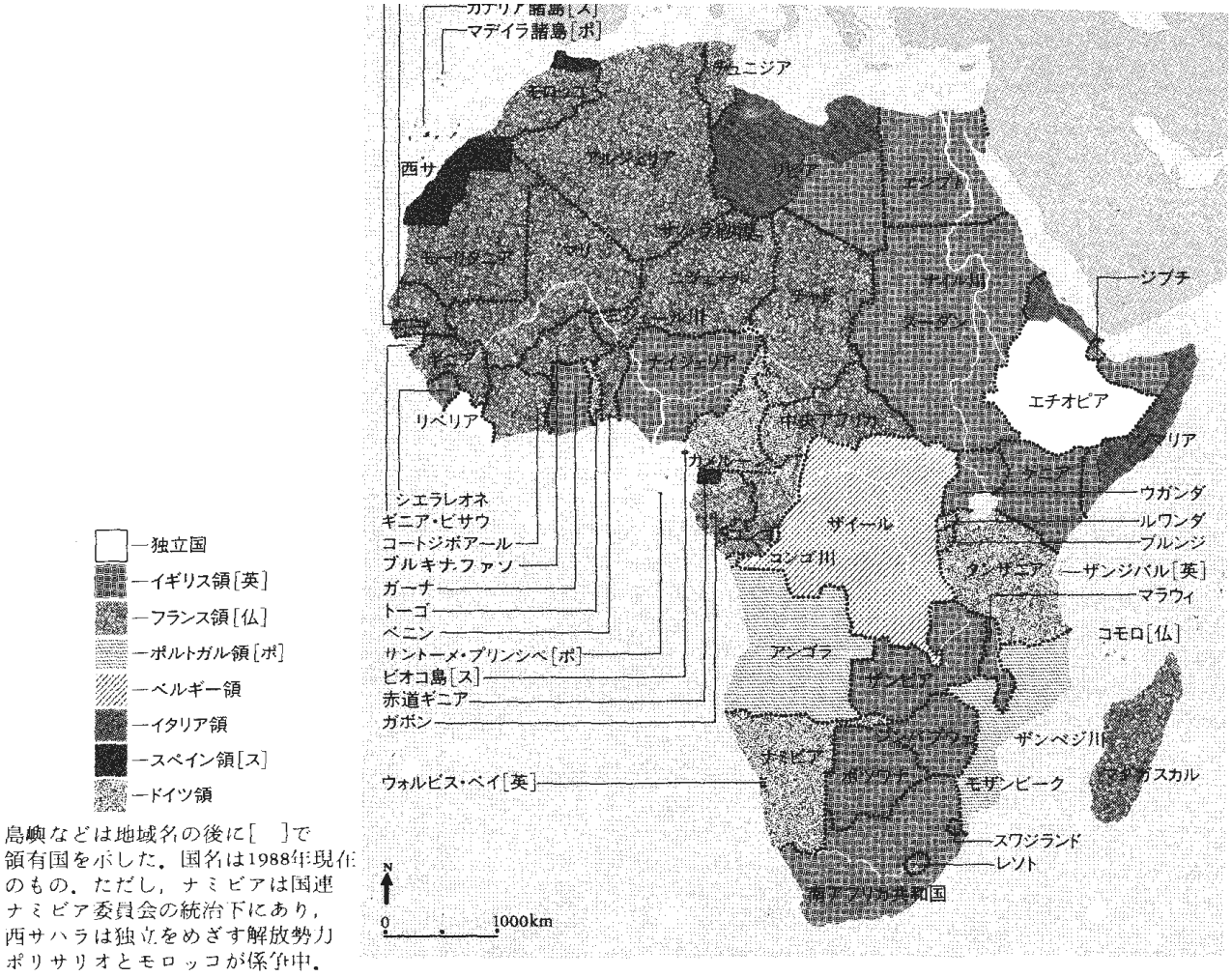
1884 年にベルリン会議が開かれ､それまで無秩序だったヨーロッパ勢力のアフリカ進出に一定の秩序を取り決めた。その会議以降もアフリカの分割競争は白熱化していった。現在でも国境が人為的に直線で分けられているところがあるのは、その地域に住んでいる部族やそれらの文化を無視して、分割してきたことを如実にしめすものであろう。

最終的にアフリカの分割競争に勝ち、広大な植民地を手に入れたのはフランスであり、それにイギリスが続いた。さらに、ドイツ、ベルギー、ポルトガル、イタリア、スペイン

が続いた。

植民地状態が続いたアフリカにおいてもナショナリズム運動がしだいに高まってきた。また、第 2 次世界大戦を景気にヨーロッパの植民地体制はいっそう弱いものになっていった。当時は、アフリカの独立国は、エジプト、エチオピア、リベリア、南アフリカ連邦（現共和国）しかなかったが、独立の時代を迎え、５３カ国が独立した。１９６０年にはそのうち１７カ国が独立し、この年は「アフリカの年」と呼ばれている。

ヨーロッパ諸国による植民地分割(1914 年)



（出典「アフリカを知る事典」）

現在のアフリカの国々と日本との比較

国　　名	面積	人口	国民総所得	主要言語	独立年月
アルジェリア民主人民共和国	6.3	0.239	0.0111	アラビア語、仏語	1962 年 7 月
アンゴラ共和国	3.3	0.103	0.0007	ポルトガル語	1975 年 11 月
ベナン共和国	0.3	0.049	0.0006	仏語	1960 年 8 月
ボツワナ共和国	1.5	0.013	0.0012	英語、セツワナ語	1966 年 9 月
ブルキナファソ	0.7	0.091	0.0006	仏語	1960 年 8 月
ブルンジ共和国	0.1	0.050	0.0002	仏語、キルンジ語	1962 年 7 月
カメルーン共和国	1.3	0.117	0.0020	仏語、英語	1960 年 1 月
カーボベルデ共和国	0.0	0.003	0.0001	ポルトガル語	1975 年 7 月
中央アフリカ共和国	1.6	0.029	0.0002	サンゴ語、仏語	1960 年 8 月
チャド共和国	3.4	0.062	0.0003	仏語、アラビア語	1960 年 8 月
コモロ･イスラム連邦共和国	0.0	0.006	0.0000	仏語、アラビア語、コモロ語	1975 年 7 月
コンゴ共和国	0.9	0.024	0.0004	仏語	1960 年 8 月
コートジボワール共和国	0.9	0.129	0.0024	仏語	1960 年 8 月
コンゴ民主共和国	6.2	0.402	0.0012	仏語、キコンゴ語、リンガラ語	1960 年 6 月
ジブチ共和国	0.1	0.005	0.0001	アラビア語、仏語	1977 年 6 月
エジプト･アラブ共和国	2.6	0.504	0.0220	アラビア語	―
赤道ギニア共和国	0.1	0.004	0.0001	スペイン語、仏語、ブビ語	1968 年 10 月
エリトリア国	0.3	0.029	0.0002	ティグリニア語、アラビア語、諸民族語	1993 年 5 月
エチオピア連邦民主共和国	2.9	0.500	0.0015	アムハラ語、英語	―
ガボン共和国	0.7	0.010	0.0009	仏語	1960 年 8 月
ガンビア共和国	0.0	0.011	0.0001	英語、マンディンゴ語	1965 年 2 月
ガーナ共和国	0.6	0.145	0.0016	英語、ガ語	1957 年 3 月
ギニア共和国	0.7	0.064	0.0008	仏語	1958 年 10 月
ギニアビサウ共和国	0.1	0.009	0.0001	ポルトガル語	1973 年 9 月
ケニア共和国	1.5	0.242	0.0025	英語、スワヒリ語	1963 年 12 月
レソト王国	0.1	0.016	0.0003	英語、ソト語	1966 年 10 月
リベリア共和国	0.3	0.023	-	英語	―
社会主義人民リビア･アラブ国	4.7	0.042	-	アラビア語	1951 年 12 月
マダガスカル共和国	1.6	0.126	0.0009	マダガスカル語、仏語	1960 年 6 月
マラウイ共和国	0.3	0.089	0.0004	英語、チェワ語	1964 年 7 月
マリ共和国	3.3	0.089	0.0006	仏語、バンバラ語	1960 年 9 月
モーリタニア･イスラム共和国	2.7	0.021	0.0002	アラビア語、仏語	1960 年 11 月
モーリシャス共和国	0.0	0.009	0.0010	英語、仏語、クレオール語	1968 年 3 月
モロッコ王国	1.2	0.226	0.0078	アラビア語、仏語	1956 年 3 月
モザンビーク共和国	2.1	0.139	0.0009	ポルトガル語	1975 年 6 月
ナミビア共和国	2.2	0.014	0.0008	英語、アフリカーンス語	1990 年 3 月
ニジェール共和国	3.4	0.085	0.0005	仏語、ハウサ語	1960 年 8 月
ナイジェリア連邦共和国	2.4	0.908	0.0076	英語、ハウサ語、ヨルバ語、イボ語	1960 年 10 月
ルワンダ共和国	0.1	0.060	0.0005	仏語、英語、キニヤルワンダ語	1962 年 7 月
サントメ･プリンシペ民主共和国	0.0	0.001	0.0000	ポルトガル語	1975 年 7 月
セネガル共和国	0.5	0.075	0.0011	仏語、ウオロフ語	1960 年 8 月
セイシェル共和国	0.0	0.001	0.0001	英語、仏語、クレオール語	1976 年 6 月
シエラレオネ共和国	0.2	0.035	0.0001	英語、メンデ語	1961 年 4 月

ソマリア民主共和国	1.7	0.069	-	ソマリ語、英語、イタリア語、アラビア語	1960 年 7 月
南アフリカ共和国	3.2	0.344	0.0298	英語、アフリカーンス語、ズール語	―
スーダン共和国	6.6	0.245	0.0022	アラビア語、英語	1956 年 1 月
スワジランド王国	0.0	0.007	0.0003	英語、シスワティ語	1968 年 9 月
トーゴ共和国	0.2	0.036	0.0003	仏語	1960 年 4 月
チュニジア共和国	0.4	0.075	0.0046	アラビア語、仏語	1956 年 3 月
ウガンダ共和国	0.6	0.175	0.0016	英語、スワヒリ語、ルガンダ語	1962 年 10 月
タンザニア連合共和国	2.3	0.277	0.0021	スワヒリ語、英語	1961 年 12 月
ザンビア共和国	2.0	0.084	0.0007	英語、ベンバ語	1964 年 10 月
ジンバブエ共和国	1.0	0.100	0.0013	英語、ショナ語、ンデベレ語	1980 年 4 月
日本国	1.0	1.000	1.0000	日本語	―

面積、人口、国民総所得(GNI)は日本との比較値

フランス語２６　アラビア語　１２　ポルトガル語５　英語２３　合計５３国

（出典　外務省ＨＰ　世界の国一覧を参照）

参考文献

http://www.faminet.net/yale/006.htmlYale University
（イェール大学）　林学及び環境学スクール環境科学修士＆開発経済学修士　大司　雄介
「胸の高さで見た景色」

http://www.mofa.go.jp/mofaj/world/ichiran/i_africa.html　外務省　キッズ外務省　世界の国

「アフリカを知る事典」　平凡社　伊谷純一郎他　1989

授業を通して学んだこと

１．地球の歴史にみるヒトの歴史

地球の年齢である４５億年を一年のカレンダーに例えるとおおよそ次のようになる。

１月１日　原始地球の誕生

２月上旬　海と陸ができる。

２月下旬　原始生命が発生する。

11 月下旬　魚類が発生

12 月中旬　恐竜時代が始まる

12 月 26 日頃　恐竜が消滅

12 月 27 日頃　哺乳類が栄え始める

12 月 31 日

23:37　いわゆるヒト（ホモサピエンス誕生）

23:58”52 農耕牧畜が始まる

23:59”46 キリスト誕生

23:59”56 ルネッサンス

23:59”58 産業革命

23:59”58”9 明治時代になる

23:59”59”5 太平洋戦争終了

このように考えるといかに地球の育みに対する人間社会の歴史の短さがよくわかる。この計算でいくと人間の一生は、約 0.6 秒となる。

ヒトが猿人から分かれて、狩猟をし、そして農耕により、少しずつ文明を発達させてきた。文明が発達するにつれて、仲間と敵が生まれ、また、自分達の土地と他人の土地、自分達の財産と他人の財産などにより、次第に人間関係が複雑になってきた。その結果争いが起こり、さらに戦争が起こる時代を今迎えている。また、地球環境も人類の発生により大きく変えられようとしている。

２．地球上の争い

人類が最初に形成した狩猟民・採集民の社会では、ほとんど争いがなく、「最初の豊かな社会」と言われていた。自分達の必要なだけの狩りをしていたので、今の我々のような時間に余裕なくせかせか働くようなことをしていなかった。そして、宗教的な価値、儀式的な価値にエネルギーを使っていたからである。

その後、土地・財産、また人間の地位が細分化されてくるにつれて、人間同士が争うようになった。小集団同士の争いから、今や国家同士が争いをしている。その原因は、長年にわたる宗教上の対立、領土に関わる争いなどである。私は遠い未来からこの歴史を振り返った場合、「争い」のあるのも通過点であり、人間が人間を傷つけたり、死に至らしめたりすることが無縁である世界が築かれることを願わないではいられない。あわせて、抑止力として核を所有する国があるが、そのボタンが押されてしまう前に、全世界で平和に話し合い、廃棄されることもあわせて祈りたい。

３．地球環境

地球温暖化が叫ばれているが、この 9000 年（先ほどの地球カレンダーでいくと、23 時 59 分 42 秒から現在まではほぼ一定になっていた。ところが現在地球の温度は上昇し続け、今のペースでは１００年間におよそ２度を予想している。そうすると、今からおよそ１０００年前の平安時代の初期に対して１０００年後、つまり年が明けて１月１日の午前０時０分 18 秒には、気温が現在よりも 20 度も上昇していることになる。地球の寿命(太陽)の寿命はあと 45 億年あると言われているので、寿命である２年目の１２月までとうてい地球は持ち堪えられそうにない。私達の子孫はどうするのだろうか、心配するのか、そこまでは関係ないというのか。

学校教育専修　佐々木　朗

「地球は未来の人達からの借り物です」という言葉がある。手遅れにならない前に（もう手遅れギリギリ？）、私達は、自己の利潤と地球環境の維持の葛藤に苛まれながらも、未来に生きる人達、動物たち、植物達のために、自分達が今できることを考え、実行していかなくてはならないし、国家、地球レベルでも真剣に取り組んでいかなければいかない問題だと思う。